

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第815号 平成26年10月7日

プラスチックのスープ?

私たちには「水に流す」という便利な言葉があります。この「水に流す」というのは、過去の経緯を一切なかったことにして咎めないという事ですが、これが成り立つのは、皆が、水には何でも飲み込んで綺麗にする力があると思っているからです。しかし、何でも水に流せるというのは、私たちの大きな勘違いである事が明らかになって来ました。

最近、深刻な海洋汚染の実態を如実に示す「プラスチックスープ」という言葉が、マスコミ等でも大きく取り上げられるようになって来ました。

この「プラスチックスープ」という言葉を知ったのは、2012年(平成24年)に出版された「プラスチックスープの海(北太平洋巨大ゴミベルトは警告する)」によってですが、この本を読むと、人類によってもたらされている海洋汚染が如何に深刻であるかが分かります。

遠目に見ると青く波打つ大海が、実は、プラスチックで出来たどろどろのスープだというのは、想像するだけで身の毛もよだちます。

さて、上述の「プラスチックスープの海」という本は、海洋環境調査研究者でアルガリータ海洋調査財団の設立者であるチャールズ・モア氏と新聞記者のカッサンドラ・フィリップス氏の手になるものですが、彼等は、「豊かで秩序だった自然が今、増加するいっぽうの永続的プラスチックで、海洋も陸も汚染されている。海洋のプラスチックはほとんど取り除けないし、すぐには消滅もしない。海と美しいビーチに、未来永劫、醜い姿をとどめるだろう。」と警告しています。そして、「地球上の生命の培養器である海洋にこの悲しい運命をもたらしたのは、現代生活を容易にしている物質であるプラスチックであり、しかもそれは、地球上のすべての人類の毎日の生活が生み出しているものだ」と指摘しています。

「太平洋ごみベルト」という言葉があります。これは、北太平洋中央部の海洋ごみが異常に集中して漂っている海域のことを指しますが、この言葉に対してチャールズ・モア氏等は、「大変便利な呼び方だが、実際とは少し違う印象を与える。その時見たのは、プラスチックでできたうすいスープである。プラスチックの破片で調



味し、ブイ、もつれた漁網、プラスチックでできた薄いスープである。」と述べています。

軽くて耐久性が高いプラスチック製品は、私達の生活には欠かせませんが、その一方で、たとえ地中に埋めたとしても、ほとんど半永久的に自然界に残るとされています。

このプラスチック製品は、川や海に不法に投棄されると、波に揉まれたり太陽の光を受けたりして次第に分解され、やがて微小プラスチックになって、海洋の環境を汚染し続ける事になります。

チャールズ・モア氏等によると、1997年の航海の最中、100平方メートル当たり230グラムのプラスチックがあると推定すると共に、ハワイと西海岸の間の約520万平方キロの広さの北東太平洋には、600万トン以上のプラスチックごみが散乱していると推計しています。

微小プラスチックは、もともと石油から作られておりPCB等の有害物質を吸着し易いといわれています。この微小プラスチックはプランクトンの6倍も海中に浮遊しており、これを魚や海鳥が餌と間違えて食べてしまう例が相次いでいるとの事です。微小プラスチックが食物連鎖に与えている深刻な影響は容易に想像が出来ると思います。

食物連鎖の頂点にいる人間は、知らず知らずの内にプラスチックスープを飲まされている可能性があるのです。

9月3日付の朝日新聞には、高知県足摺岬沖の黒潮が流れる外洋の潮目で大量のごみが流れているのが見えたこと、また、同月8日付の北海道新聞にも、深海生物ダイオウグソウムシの胃から、ビニールやゴムなどの人工物が見つかる例が相次いでいるといった記事が掲載されています。

海洋汚染は、遠い世界の話ではないという事です。

海は、無限に広がっており、人間が捨てたものは皆のみ込んで浄化してくれるという間違った思い込みは、捨てなければなりません。

海は無限ではないのです。人類が、知恵を働かせず、何の対策も取らないまま海を汚し、痛めつけ続けるなら、早晚人類は、あの青く広い海によって仕返しされる日が来るのではないかと案じられてなりません。(塾頭：吉田 洋一)